

指定理由書

- 1 名 称 豆田遺跡出土木簡 附井戸枠墨書部材
(まめだいせきしゅつどもっかん つけたりいどわくぼくしょぶざい)
- 2 種 別 考古資料
- 3 員 数 17点、附2点
- 4 所 在 地 姫路市四郷町坂元414番1 (姫路市埋蔵文化財センター)
- 5 所 有 者 姫路市
- 6 時 代 室町時代

7 説 明

(1) 豆田遺跡について

JR 姫路駅から西方約 3km に広がる平野部に位置する弥生時代と中世の遺跡である。中播都市計画事業英賀保駅周辺土地区画整理事業に伴い発見された。発掘調査は平成 13 年度から令和 5 年度にかけて実施した。

調査地一帯の鎮守である荒川神社は「岩西社」であり、氏子圏は西庄(脇)、岡田、井ノ口、町坪、玉手、中地である。これらの村は近世文書にはいずれも「伊和ノ西」を冠称する村落であり、室町時代の国衙別納「伊和西」の範囲と考えられる。平安時代に「伊和郷」が東西に分かれたとされることから、それ以前は「伊和郷」に含まれていた。遺跡は、「伊和西」のうち、町坪村と玉手村にまたがって存在する。調査前の付近一帯には条里地割が良好に残存していた。

遺跡の主体となる時期は中世で、11 世紀後半から 16 世紀後半にかけての遺構が、遺跡内で地点を変えながら継続的に確認できる。検出した中世遺構はいずれも飾磨郡の条里地割の方向に沿っている。また、15 世紀前半、15 世紀後半から 16 世紀前半、16 世紀後半の 3 時期の居館を確認している点も特筆される。

(2) 木簡出土遺構の概要

木簡は 15 世紀前半の居館の井戸(SE10)内から出土した。井戸は居館内の主要建物とみられる建物跡に近接している。井戸の掘方は直径約 4m の円形で、深さは遺構検出面から 2.2m である。井戸は、縦板組の方形井戸枠の内側に縦板組の多角形井戸枠を設置する二重構造であった。外枠の方形井戸枠は、1 辺約 1.2m で、各辺にヒノキ材を縦位に 4～5 枚用い、合計 19 枚で構築される。板材は残存長 138.3～159.1 cm で、幅は 6.7～13.9 cm の狭いものと 23.9～30.3 cm の幅広の部材がある。厚さは 2.1～3.3 cm を測る。四隅に支柱を配し、横棧を通し、横棧と縦板を目釘により固定している。内枠は多角形井戸枠で残存

長 153.2～163.8 cm、幅は 28.1～29.9 cm、厚さは 3.1～5.2 cmの柂目材を縦位に用い、11 角形としている。部材側面 2 箇所にはほぞ穴を設け、ほぞにより固定するとともに外面を鉄 錠により固定している。室町時代の二重構造の井戸は、草戸千軒町遺跡や京都などの富裕 層が想定される場や都市的な場で見つかっているが、県内では多可郡多可町の安坂・城の 堀遺跡 1 例のみである。

外枠の方形井戸枠を構成する縦板 2 箇所に墨書による花押が書かれている。花押は隣 り合う板材に書かれ、部材の下端が揃っていないにもかかわらず、その位置が揃っている ことから、井戸枠を設置した後に掘方内で花押を書いた可能性がある。

花押のある木材は、アルコール・酢酸ブチル・樹脂法による保存処理を、その他の井戸 部材は P E G 含浸法及び真空凍結乾燥法による保存処理を行っている。

(3) 木簡について

木簡は 17 点出土した。内容は、呪符木簡 1 点【958】、祈祷札 11 点（大般若経 6 点【946・ 948・949・951・954・955】、仁王般若経 5 点【944・945・947・950・953】）、不明 5 点（3 点は文字痕あり【952・956・959】、2 点【957・960】は形状から同様の木簡であると考え るが、墨痕は確認できない。なお、割れ等により経名が確認できない木簡についても、大 般若経は十六善神王、仁王経は五大力菩薩と対応していることから、読誦した内容が推測 できる。

17 点の木簡のうち、5 点に年号が書かれている。古い順から応永八年【944】、応永十一 年【945】、応永十五年【946】、応永十六年【947】、応永二十年【948】である。これらの 木簡は井戸内に廃棄されたものであるが、複数の年号が混在して出土したことから、井戸 内に一度に廃棄されたものと考えられる。

木簡はいずれも杉の板目材を使用している。呪符木簡は上部左右に刻みを施し、祈祷札 は上部を圭頭状に加工している。祈祷札は法量から、大型と小型に分類できる。大型品は、 長さ 51.2～48.6 cm、幅 9.1～7.6 cm、小型品は、長さ 31.9～25.5 cm、幅 7.3～5.6 cmで、 一定の規格が認められる。墨の残りは全体的に良くないが、斜光をあてることで、木簡表 面の墨痕の凹凸が確認できる。このことは木簡が屋外等において日光や風雨にさらされ る環境下にあったことを示し、木簡に残る釘穴とともに使用状況を反映している。

木簡は、全てアルコール・酢酸ブチル・樹脂法により保存処理を行っている。

(4) 所見

大般若経等の祈祷札は、『木簡研究』等による類例検索で、全国 33 遺跡から 36 点の出 土が確認できる（豆田遺跡除く）。豆田遺跡では祈祷札が 11 点出土しており、1 遺跡・1 遺構からの出土事例としてまとまっている。また、判読できた年号から、応永年間の十数 年にわたり断続的に祈祷が行われたことが判明する。木簡の出土した井戸枠に書かれた花 押は、「武家様」あるいは「足利様」と呼ばれる室町時代の武家特有のものであることか ら、こうした祈祷と武家の関わりを具体的に示す資料と評価できる。